

スウェーデンからの留学生を受け入れて

北海道おといねっぴ美術工芸高等学校校長

石塚 耕一



お別れ会で3年生と一緒に記念撮影

本校は北海道で一番人口が少ない音威子府村にある村立高校です。全校生徒約百名の小さな学校ですが、全国から生徒を受け入れ特色ある教育を展開しています。音威子府村は86%を森林が占めています。その象徴となるのが工芸作家砂澤ビッキの美術館「エコ・ミュージアムおさしまセンター」と村技といわれるクロスカントリースキーです。このことは工芸科である本校の高いレベルの美術・工芸作品や全国2連覇を果たしたクロスカントリースキー部の活躍と重なります。過疎と少子化の中で、本校に寄せられる期待は大きく、その取り組みそのものが村の活性化につながっています。

本校は金道唯一の工芸科として、描く、つくる、対話するという造形活動によって、創造力を育成し人間力を高める教育を実践しています。平

成18年度からは、生徒・保護者・村民・教職員がともに「夢を語る学校づくり」を推進しています。具体的には、①生徒の可能性を見つけ、

伸ばし、自信を与える②質の高い美術工芸作品の制作③北海道東海大学等との高大連携事業④国立教育政策研究所教育課程研究指定校事業⑤村の文化センターとしての地域への貢献です。平成19年度から実施した高大連携事業は大きな成果を上げていますが、もう一つの柱としてスタートさせたのが国際理解教育です。本校は工芸科ということもあり、北海道東海大学の支援を受けながら家具づくりの先進地であるスウェーデンとの交流を図りました。国際理解教育には大きな可能性があります。留学生の受け入れにより、学校の活性化はもちろんですが、生徒や教職員の意識改革につながりました。



工芸の授業風景で、本校生が工具の使い方について説明

アンデルソン君とノルド君

平成18年度本校で受け入れたのはスウェーデン・レクサンド高校木工科の生徒、マテイアス・アンデルソン君とヨナス・ノルド君の2人です。スウェーデンの高校ではインターンシップが義務づけられており、その一環として帯広市での企業研修後に本校で研修を行うことになったのです。実現できたのは、北海道東海大学がスウェーデンの大学との交流をしていること、当別町がスウェーデン・レクサンド市と姉妹都市交流をしていること、本校が工芸科であることなどの理由によるものでした。

本校は留学生を受け入れた経験がありませんので、教職員、寮職員、生徒の中には不安を感じるなど消極的な意見もみられました。本校での研修は2週間という短期間ですので、いかに効率的で内容のある交流ができるかということが大切になります。本校には寮がありますので、それを宿泊施設として活用しながら寮内での交流も図りました。

留学生の受け入れにあたっては国際交流委員会を設置し、英語科の教諭を中心にしながら対応しました。しかし、彼らといつも一緒にいるわけにはいきませんので、生徒の担当

者を決め、寮での生活や休日は生徒にまかせることにしました。このことが生徒間の交流を深め、本校生の意識を高めました。お互いを理解しようとする姿勢は、国際理解教育の基本です。日ごろ、英語が苦手な生徒が熱心に勉強したり、あるいはスウェーデン語の本を買って勉強する姿が見られるようになりました。何より様々な方法を通して交流を図ろうとする生徒が多くなり、その姿勢からは、自ら学び、自ら考えるという教育で最も大切なものが生まれているように感じました。

授業については、工芸等の実技教科を中心にしながら、英語、保健体育、地歴公民などに参加させました。彼らのために特別プログラムを準備はしましたが、基本的には日本の授業の中にそのまま入ってもらいました。彼らは木工科の生徒ですから、授業では日本らしいカシユ塗りによる箸（はし）の制作を行いました。また、グループで制作するカヌーづくりにも参加してもらいました。彼らにとっては新鮮な体験だったようです。

本校生は彼らに丁寧な箸のつくり方などについて手助けしました。工具については、日本とスウェーデン

では形も扱い方もまったく違います。例えば日本のカンナやノコは手前に引いて使いますが、スウェーデンでは押し使います。この文化の違いに最初とまどったようですが、工具の使い方や制作にあたっての留意点を本校生が教えました。このことによって心のつながりや信頼関係が生まれたように思います。驚いたのは、本校生が英語やスウェーデン語の必要性を感じ、自主的に勉強するようになったことです。この機会を逃すまいと、何事にも熱心に取り組むようになったのは大きな成果です。

留学生が参加した講演会「スウェーデンの学校と日本の学校」レクサ「みよう」では、スウェーデンについて本校生が楽しく学ぶことができましたし、公民館で実施している「居合（いあい）講座」に留学生も参加させ日本の文化や伝統に触れてもらいました。

互いに異文化を体験

今回の目的は、留学生と交流しながら国際理解を深めることです。スウェーデンの文化を知ること日本文化を知ることでもあります。短期間ではありましたが、言葉、生活

様式、食文化が日本とスウェーデンではまったく異なることを体験することができました。つまり、お互いがお互いの文化を知ることができたのです。このことはとても有意義なことだと思います。

また、国際交流には英語が必要であるということも学びました。コミュニケーションを図るため、生徒は英語やスウェーデン語を勉強しましたが、国際化が進む現代において英語がいかに大切なものであるかを知ることができたと思います。言葉は相互のコミュニケーションを図る大切な手段であることを自覚した意味は大きいと思います。

さらに、この交流によって生徒一人ひとりに思いやりの心が生まれたことは大きな成果でした。留学生は日本の高校生が親切で素晴らしいと言っていました。その思いやりが、お互いの友情を深め、心を豊かにしました。優しさを親切さがこの交流を通して生まれ、全校に広がりました。留学生にとっては驚くこととの連続だったと思いますが、この2週間は学校や寮が生き生きとしていました。間違いなく有意義で忘れられない体験になったと思います。別れの涙がそのことを物語っています。



日本の工具「鉋（かんな）」の調整を真剣に行う

す。

本校生徒の感想

最後に生徒の感想を紹介します。

○言葉が違っていても優しさがあれば気持ち伝わる。そんなことを学ぶことができました。

○彼らは一生懸命言葉を理解しようとしていましたので、僕も英語で伝えようと努力しました。彼らは楽しく僕たちと変わらないことを知りました。

○私たちが何かしてあげようと思っ
ていましたが、逆に2人から得たこ
との方が大きかったような気がしま
す。クラスが常に生き生きとしてい
ました。

○彼らと過ごして少し英語が分かる
ようになりました。うれしかったの
は2人が日本語を話してくれるよう
になったことです。別れの時はすご
く悲しかったです。

○国際交流は初めてですが、他国の
人と仲良くなれ、とても楽しい2週
間を過ごすことができました。本当
にいい経験をさせてもらいました。

○話す言葉が違ってても、伝えたい気
持ちがあれば通じるということがわ
かりました。彼らと接して自分の世

界が広がりました。

○スウェーデン語のスピーチをし
て、自分に自信が付き、一步成長で
きました。

○英語が苦手な私でしたが、2人は
理解してくれました。こんな交流は
二度とないかもしれません。2人に
出会えて本当に良かったです。

○私は外国に偏見を持ってしまし
たが、今回の交流でなくなりました。
人を大切に思う気持ちが、心から生
まれてきました。

○出会いの大切さを感じました。き
れいな時間でした。

○彼らは、私の中にある優しさを教
えてくれました。彼らのすごいところ
は、たった2週間なのに、人に涙
させ、感動を与えたことです。

○別れの寂しさを身を持って実感し
ました。2人のことは一生忘れるこ
とはありません。思い出は、自分の
心の中に生き続けると思います。

○たった2週間だったのに、別れる
時は自然に涙が出ました。それだ
け、私にとって彼らの存在は大きか
ったです。

○2人の笑顔は素敵でした。これか
らもずっと友達です。ありがとう。

(了)



家政部の生徒が作ったスウェーデン料理を一緒に食べる



公民館で地域住民が居合（いあい）を指導